Osaka University Knowledge Archive

Title	尾崎翠「こほろぎ嬢」論 : 神経病、反逆、頭を打たれること
Author(s)	石原, 深予
Citation	阪大近代文学研究. 2014, 12, p. 32-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68330
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

尾崎翠「こほろぎ嬢」論
――神経病、反逆、頭を打たれること――

石原 深予

はじめに

尾崎翠「こほろぎ嬢」は一九三二（昭和七）年七月、女性文芸誌『火の鳥』に発表された。この作品は「第七官界彷徨」と並ぶ尾崎の代表作であり、若き日の太宰治が称賛したと伝えられる。先行研究では、この作品は主にフェミニズム批評の観点から次の二点について論じられてきた。まず都会の単身生活者と見られる成人女性が描かれていることから、尾崎自身の伝記事項と関わって論じられてきた。また作中で逸話が語られる詩人「ゐりあむ・しやあぷ」の心が「男のときはしやあぷのペンを取つてよき人まくろおどへの艶書を書き、詩人の心が一人の女となつたとき、まくろおどのペンを取つてよき人しやあぷへ艶書した」という「分心」と語られるモチーフに関わっても論じられてきた。ほかに精神病理学的アプローチや映画からの影響など様々な観点から論じられている。小稿ではまず、「こほろぎ嬢」における「私たち」という語り手の特徴を確認する。この語り手は曖昧な伝聞情報に影響されながら、主人公であるこほろぎ嬢や彼女の飲む粉薬について否定的な解釈を有しつつも、実態はそうでもないと捉えているような特徴を有する。次に「桐の花」と「こほろぎ」というモチーフの造形に関する詩歌からの影響を確認し、また「ゐりあむ・しやあぷ」の逸話における古典文学や他作家による先行作品との関係も検討する。そして物語において「神経病」とされるものに着目して作品を読み進める。それらを踏まえて主人公であるこほろぎ嬢の「頭を打たれる」感覚とその孤独について考察したい。なお小稿では以後、作品名をあらわす場合には「こほろぎ嬢」とカギカッコ付きであらわし、登場人物のこほろぎ嬢をあらわす場合にはカギカッコは付けないであらわす。

一　こほろぎ嬢についての曖昧な情報と否定的な見解

「こほろぎ嬢」における「私たち」という一人称複数形の

語り手については、すでに先行研究において論じられてきた。近藤裕子氏は「「私たち」という語り手は、「たち」という複数性をあらわす接尾語を抱えてはいるが、囲い込んでいる複数の「私」の間に混乱や葛藤は見られない。」と指摘されており(1)、竹田志保氏はこの語り手が「差異を持たない集合体であり、そこに出所も真偽も不明で、なおかつ散漫な「風のたより」や「風説」が舞い込んでいる」ことを指摘されている(2)。筆者はこれらの先行研究を踏まえて次の問題について考えたい。語り手「私たち」は信用に足るかどうか分からない「風のたより」や「風説」、心理研究に熱心な医者「幸田当八氏が発見した学説」といった真偽が不明である学説などをまじえつつ、この物語の主人公であるこほろぎ嬢について紹介する。しかし「風のたより」や「風説」、「幸田当八氏が発見した学説」などを受けて紹介されたこほろぎ嬢の様子は、「私たち」がその後に語る物語におけるこほろぎ嬢の様子とは、必ずしも一致しないのである。本節では語り手によって「風のたより」「風説」として紹介される「途上の噂ばなし」について検討したい。

さて、物語の冒頭で「私たち」はこほろぎ嬢について、「知己に乏しく」「いろんな意味で儚い生きもの」と紹介する。そしてその原因を説明する「風のたより」を次のように紹介する。

風のたよりによれば、私たちの女主人がこの世に誕生したとき、社交の神、人間の知己関係を受持つ神などが、匙かげんをあやまつたのだといふ。(略)また、すこし理屈の好きな風は、私たちに向つてまことらしく言つた――この儚いものがたりの女主人の生れた頃は、丁度神々の国で、何とかといふ思想が流行してゐた。この思想のかけらが、ふと、女主人の頭の隅つこにまぎれ込んだものであらう。或は心臓の隅つこかも知れない。(略)それで、この女主人は、神々の静寂な思想のかけらを受けて、騒々しいところ、たとへば人間のたくさんにゐるところなどを厭ふやうになつたのか、或は神々の騒々しい思想のために耳がつんぼになつたのかも知れない。つんぼといふものは、もともと(理屈の好きな私たちの来客は、いくらか声を大きくして、最後の断言をした)社交的性情に乏しいものである!逃避人種である!

この理屈好きの風の見解は、私たちに半分だけ解つたやう感じを与へた。(略)そして私たちは、朧ろげながら思つたことである。このものがたりの女主人は、たぶん、よほどの人間ぎらひなのであらう。

このように「私たち」は、こほろぎ嬢が非社交的な人物で「つんぼ」であるかもしれないという「風のたより」による情報を受けて、こほろぎ嬢が「よほどの人間ぎらひなのであらう」と推測する。しかしその後に「私たち」の語る物語に

おいて、こほろぎ嬢は図書館の地下室食堂で出会った女性に自ら話しかけようとしたり、彼女と会話するのが難しそうだと判断すると、心中で彼女に向けたひとりごとを言う。また、物語のなかではこほろぎ嬢が「つんぼ」である様子は語られない。したがって「私たち」が「風のたより」による情報をふまえてこほろぎ嬢を「よほどの人間ぎらひなのであらう」と推測したことは、必ずしも当たっておらず、またこほろぎ嬢が「つんぼ」かどうかは分からない。

次に「私たち」はさらなる「風のたより」による情報から、こほろぎ嬢が「一種の粉薬の常用者」で「これは争ふ余地もない事実であつた」と紹介する。そして粉薬の色やその副作用について「風のたより」による情報を紹介する。その後に「私たち」が語る物語においても、こほろぎ嬢の通う図書館の建物について「粉薬で疲れた頭をも、さう烈しくは打たない」色であることが語られることから、こほろぎ嬢が粉薬を常用していることはうかがえる。ただし粉薬の色については語られず、粉薬の色は不明である。

「私たち」はこほろぎ嬢が粉薬を飲む原因について「つんぼの憂愁から自身を救ひだすために」「よけいつんぼになるために用ひ続けてゐるとも」という「風のたより」による情報を紹介する。しかし「私たち」が語る物語のなかでこほろぎ嬢が粉薬を飲むのは、彼女が「哀愁」をあじわい「悲しんだり落胆したり」したと語られる場合である。それは、こほろぎ嬢が「ゐりあむ・しやあぷ」という詩人に心を捕らえられ調査を進めたにもかかわらず、彼についての情報を得られなかった時のことである。彼女はある文学史の序文を読んで、彼の著作が「健康でない文学、神経病に罹つてゐる文学等」であるため出版書肆の主人から嫌悪されたことによって、文学史の著者たちが彼を文学史から「割愛」したと知って、悲哀や落胆をあじわった。このようにこほろぎ嬢は「文学史の序文によつてひどく打ちつけられて」悲哀や落胆をあじわい「頭痛がひどくなつた」ために粉薬を飲むのであり、「風のたより」によってこほろぎ嬢が粉薬を飲む原因とされていた「つんぼ」に関することがらは、こほろぎ嬢が粉薬を服用する原因ではない。

さらに「私たち」は粉薬について「これは精神麻痺剤のたぐひで、悪徳の品にちがひない。健康な良心や円満なセンスを持つ人々の口にすべきものではないであらう」と否定的な見解を述べる。そしてさらなる「風説」によって粉薬の副作用を次のように紹介する。（傍線は筆者による。）

この粉は、人間の小脳の組織とか、毛細血管とかに作用して、太陽をまぶしがつたり、人ごみを厭つたりする性癖を起させるといふことである。その果てに、この薬の常用者は、しだいに昼間の外出を厭ひはじめる。まぶしい太陽が地上にゐなくなる時刻になつて初めて人間らしい心をとり戻し、そして二階の借部屋を出る。（こんな

薬の常用者は、えて二階の借部屋などに住んでゐるものだと私たちは聞いた。）

こんな粉薬の中毒人種は、何でも、手を出せば掴み当てれるやうな空気を掴まうとはしないで、何処か遠い杳かな空気を掴まうと願望したり、身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界をば彼等の身勝手な意味づけから恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑したり、つひに、映画館の幕の上や図書館の机の上の世界の方が住み心地が宜しいと考へはじめるといふことだ。

「私たち」が語るこほろぎ嬢の様子を見ていくと、たしかに、雨で「太陽もさほど眩しくはなかつたので」こほろぎ嬢が「出掛けることにした」ことや、こほろぎ嬢が「二階の借部屋」に住んでいる様子が語られる。また「何処か遠い杳かな空気を掴まうと願望」することについては、こほろぎ嬢が異国の神秘的な詩人である「ゐりあむ・しやあぷ」について図書館で調べていることが該当していると考えられよう。しかし「身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界をば彼等の身勝手な意味づけから恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑」することについては、その通りとも言いきれない。たしかにこほろぎ嬢は、図書館の地下室食堂で出会った女性を「もはや疑ふところもなく、先方を産婆学の暗記者と信じてしまつたのである」と語られるように、この女性に「身勝手な意味づけ」をするが、こほろぎ嬢は彼女について最初に「恐れたり、煙たがつたり、はては軽蔑したり」といった否定的な意味づけをしたわけではない。むしろ「丁度いい話対手」であると、自分にとって都合のよい肯定的な意味づけをしたり、心中ではあるが、自分の葛藤を彼女に向けて告白してもいる。ただしその告白の中で「あなたはたぶん嗤はれるでしょう」と彼女から自分が「嗤はれる」ことを想像しており、彼女を「恐れ」ながら告白しているとは言えよう。

またこほろぎ嬢が「停車場から図書館へ運ばれた」とあることから彼女が電車で図書館へ通っていることが分かるが、こほろぎ嬢が停車場や車内等の「人ごみ」を厭う様子は語られていない。そしてこほろぎ嬢が「せつせと図書館通ひを始めてしまつた」ことから、「図書館の机の上の世界」に親しんでいるであろうことは肯われるが、これはこほろぎ嬢には図書館で調べものをするという目的があるからで、こほろぎ嬢が、「身のまわりに在るところの生きて動いてゐる世界」より図書館の机の上の世界を「住み心地が宜しいと考へはじめ」ているような様子や、また彼女が映画館に通っている様子も語られていない。こほろぎ嬢が「映画館の幕の上や図書館の机の上の世界の方が住み心地が宜しいと考へはじめ」ているとは限らないのである。

そして「私たち」は粉薬の副作用についての「風説」を受けて「この粉薬は、どう考へても、悪魔の発明した品にちが

ひない。人の世に生れて人の世を軽蔑したり煙たがるとは、何といふ冒瀆、何といふ僭上の沙汰であらう。（略）せめてこのものがたりの女主人ひとりだけでも、この粉薬の溺愛から救ひださなければならない」と粉薬について「悪魔の発明した品」と過剰に否定的に捉えている。しかし、「私たち」が語るこほろぎ嬢の様子は、先に述べたように必ずしも「人の世に生れて人の世を軽蔑したり煙たがる」ということはなく、また「溺愛」というほど粉薬を大量に何度も飲んでいる様子も語られていない。

以上より「私たち」が「風のたより」「風説」といった「途上の噂ばなし」をまじえながらこほろぎ嬢を紹介した内容のなかで、後に「私たち」が語るこほろぎ嬢の姿と確実に一致するのは、こほろぎ嬢が粉薬を飲んでいることと二階の借部屋に住んでいることだけだと分かる。また「私たち」は「風のたより」より、こほろぎ嬢を「よほどの人間ぎらひ」と解釈したり、こほろぎ嬢の飲む粉薬について、曖昧な情報を得ては「精神麻痺剤のたぐひで、悪徳の品」、その副作用について「何といふ冒瀆、何といふ僭上の沙汰」と否定的な発言をする。しかし後に「私たち」が語るこほろぎ嬢の姿や粉薬は、必ずしもそうとは言えないものである。

このように「私たち」は、こほろぎ嬢が「知己に乏しく」「いろんな意味で儚い生きもの」であることについて、曖昧な情報から否定的な意味づけを重ねてゆくが、それらは後に「私たち」自身の語るところによって、そうとも限らないことが判明する。「私たち」は「途上の噂ばなしなどを意味もなく並べて」とも語り、「途上の風のたより」であるがゆえに、「人々はそれ等の話によつて」こほろぎ嬢を「背徳の女と決めてしまはれなくても好いであらう」とも語る。しかしそれは「私たち」以外の人々がこほろぎ嬢について自由に解釈する余地があることを示しているのであって、「私たち」とは、曖昧な情報に影響されながら、こほろぎ嬢や彼女が飲む粉薬について否定的な解釈を有しつつ、その実態は「途上の噂ばなし」ほどではないと捉えている語り手であると考えられる。

二　「桐の花」と「こほろぎ」
――「こほろぎ嬢」における詩歌の影響

「桐の花」とこほろぎ嬢とは、語り手「私たち」によって、ともに「神経病」にかかっているとされる。本節では「桐の花」およびこほろぎ嬢の名として付されている「こほろぎ」のイメージにおける、先行する詩歌からの影響について検討する。

まず「桐の花」について検討したい。桐の花は「昔から折々情感派などの詩人のペンにも止つたほど」と語られる。しかし桐の葉は中国文化の影響で日本漢詩には早くから用いられて、秋の景物として詠まれ、和歌においても『新古今和歌

集』のころから詠まれたが、桐の花は『枕草子』第二十四段で「桐の木の花。紫に咲きたるは、なほをかしきに」と言及があるものの歌材とはならず、近世になって俳諧の四月の部に取り上げられるようになった(3)。したがって桐の花が「昔から」詩人のペンにとまったというのは必ずしも適切な説明ではないが(4)、ここで想起されるのが、北原白秋の第一歌集『桐の花』(東雲堂書店　一九一三)である。白秋は学生時代からすでに歌人・詩人として名声があったが、隣家の人妻との恋愛による姦通罪でスキャンダルとなり、その事件の直後にこの歌集を刊行している。恋愛のために罪に問われた白秋が「情感派」と評されることは奇異ではないだろう。またこの歌集に収録されている「さしむかひ二人暮れゆく夏の日のかはたれの空に桐の匂へる」「桐の花ことにかはゆき半玉の泣かまほしさにあゆむ雨かな」という桐の花が詠みこまれた所収歌において、「桐の花」と「匂ひ」や「雨」という語が共起している。「こほろぎ嬢」においても「雨」の降っている場面での「桐の花」の「匂ひ」について語られる。また『桐の花』の「集のをはりに」には「わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむとす。わがわかき日も哀楽も遂には皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。」とある。「こほろぎ嬢」の作品内での時期は五月で、桐の花も「もはや散りぎわに近」い状態であり、「皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき」という表現と通じあう。以上より「情感派などの詩人」のモデルとして白秋が考えられ、また「こほろぎ嬢」における「桐の花」の造形には白秋『桐の花』所収歌や「集のをはりに」が影響していると考えられる。

次に「こほろぎ」について検討したい。「こほろぎ嬢」の物語の時期は五月であるのに、女主人公は「こほろぎ」という秋鳴く虫の呼び名で語られている。語り手は彼女が春より秋にふさわしい人物であるとして、次のように語っている。

こほろぎ嬢の外套はさう新しい品ではなくて、丁度桐の花の草臥れてゐるほどに草臥れてゐたのである。(略)こほろぎ嬢の様子は(略)あまりくつきりと新鮮な風采ではなかつた。そして外套の中の嬢自身も、私たちの眼には、やはり外套とおなじほどの新鮮さに見えた。

こほろぎ嬢の風姿は、それはあまり春の光景にふさはしいものではなかつた。嬢の後姿を包んでゐるものは、一枚の春の外套であるとはいへ、もはや色あせて、秋の外套の呼名にふさはしい色あひであつた。そして私たちは、こほろぎ嬢の風姿をいつそ秋風の中に置きたいと思つたことである。

草臥れ色あせた外套、その外套と「おなじほどの新鮮さ」に見えるという、「嬢」と呼ばれるとはいえ、すでに若くはないと思われるこほろぎ嬢は「秋風」の中にいるのがふさわしいという。

『角川古語大辞典第一巻』（一九八二）によると、「こほろぎ」という語は上代では現在のこおろぎを中心として、きりぎりす、松虫、鈴虫など秋鳴く虫の総称として用いたものらしい。また平安時代以降の雅語としての「きりぎりす」は、その用例から見て今日のこおろぎと考えられる。さて大谷雅夫氏によると(5)、漢詩では「蟋蟀」と「秋風」とが取り合わせて詠まれることが多く、風が秋の訪れを知らせ、こおろぎが鳴きはじめるという連想があったという。その影響を受けた『萬葉集』中の歌として「秋風の寒く吹くなへ我がやどの浅茅がもとにこほろぎ鳴くも」（巻十・二一五八）を挙げられている。また「中国古代の詩には時の推移を悲しむ心が繰り返し詠われる。特に秋の詩は、悲哀一色に染められると言って過言ではない。詩語の「蟋蟀」もまた、悲しき秋の訪れ、一年の暮れを告げるものとして、人の悲哀の情をたちまちに引き起こすものであった」ことに対して、『萬葉集』の歌では秋は悲しみの季節では決してなく、「こほろぎ」の声も秋の楽しく美しい音として聴き取られていたことを指摘されている。高柳祐子氏は(6)、『萬葉集』と『古今和歌集』との「きりぎりす（こほろぎ）」詠の違いとして、後者に漢籍由来の「悲秋」の観念が定着し入り込んでくること、こほろぎの鳴き声が我が身に悲しみをかきたてるものとして詠まれるようになっていったこと、また「きりぎりす」詠のそのような特徴は、「きりぎりす」のみではなく「虫」詠一般に広く認められることを指摘されている。また院政期において和歌での「きりぎりす」は用例が増加し、他の虫と異なる独自の詠みぶりがあらわれはじめ、その特徴の一つとして「晩秋の「きりぎりす」」が詠まれることを挙げられている。鳴き弱る虫の声に美を見いだすことを詠んだ歌は院政期以前にも見られたものの、院政期に格段に増加するという。また新古今時代には「晩秋の虫」として詠まれることが圧倒的に多くなるという。

ここで『新古今和歌集』(7)所収の次の歌を確認したい。「（詞書）枯れゆく野べのきりぐすを（作者）中務卿具平親王（歌）秋風にしほるゝ野べの花よりもむしの音いたくかれにけるかな（訳）秋風に吹かれて弱り枯れる野の花よりも虫の声の方がひどくかれてしまったことだ。（巻第五　秋歌下　五一〇）」

桐の花とこほろぎ嬢とは「こほろぎ嬢の外套はさう新しい品ではなくて、丁度桐の花が草臥れてゐるほどに草臥れてゐたのである」「外套の中の嬢自身も、私たちの眼には、やはり外套とおなじほどの新鮮さに見えた」というように、ともに否定的なイメージでの年老いた、古びたイメージを持つものとして語られる。このような桐の花やこほろぎ嬢の姿の背後には、この物語が雨の日の出来事であることからも、小野小町の古歌「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」を想定してもよいだろう。しかし「桐

の花」は繊弱とはいえ肯定的に語られる「芳香」を発している。一方「こほろぎ嬢」が音声を発する様子については肯定的には語られない。『新古今和歌集』五一〇番の和歌において「野べの花」が「枯」れるよりも「むし（きりぎりす＝こほろぎ）の音」の方がひどく「嗄」れてしまった」ように、「こほろぎ嬢」の物語においても「（桐の）花」よりも「こほろぎ（嬢）」の方が、より「かれ」てしまった（死に近い）状態である。この和歌も「こほろぎ嬢」の設定の背後に想定されるのではないだろうか。

また桐の花の色に着目すると、桐の花は薄紫色であるが、こほろぎ嬢の飲む薬の色は「黄色つぽい」という風説があり、「神経病に罹つてゐる文学」作品には「黄色い神経派」と称される一派による作品がある。紫と黄色とは補色関係にあるが、自然の摂理にそって散ってゆこうとし、散りぎわに近くてもなお「芳香」を発する桐の花の色である「紫」と、この作品において「神経病」という性質をあらわす「黄色」とは対照的である。

次に近代詩では島崎藤村『若菜集』（春陽堂　一八九七）の「おきぬ」に「あゝあるときは吾心／あらゆるものをなげうちて／世はあぢきなき麻茅生の／茂れる宿と思ひなし／身は術もなき蟋蟀の／夜の野草にはひめぐり／たゞいたづらに音をたてゝ／うたをうたふと思ふかな」とあり、「うたをうたふ」という擬人的表現でこおろぎの鳴く声が表現されている。また川崎賢子氏は(8)『若菜集』より「君がこころは」で乙女の感傷をこおろぎに例えた次の詩行を紹介されている。「君がこゝろは蟋蟀の／風にさそはれ鳴くごとく／朝影清き花草に／惜しき涙をそゝぐらむ」。この詩の続きは「それかきならす玉琴の／一つの糸のさはりさへ／君がこゝろにかぎりなき／しらべとこそはきこゆめれ」であるが、琴の材料は桐であり、この詩では「こほろぎ」と「桐」とが共存していると言えよう。（筆者注：『若菜集』からの詩の引用の改行は「／」で示した。）

北原白秋にも「こほろぎ」という詩があり、初出は第一次『新思潮』第六号（一九〇八・三）、のち詩集『邪宗門』（易風社　一九〇九）に収録された。この詩の初出誌には尾崎翠「地下室アントンの一夜」の典拠の一つと考えられるチェーホフ『決闘』（小山内薫訳）が掲載されている。この詩では「微（ほの）に」「こほろぎ啼ける」様子とともに、人間が野で戦い悲惨に死んでいくさまが描かれている。

また河井酔茗の詩「こほろぎ」で描かれている「こほろぎ」の形象も「こほろぎ嬢」の発表された時代の「こほろぎ」のイメージとして目をとめてよいのではないだろうか。河井酔茗「こほろぎ」は詩集『霧』（一九一〇　東雲堂）に収録され、のちに『酔茗詩集』（アルス　一九二三）に収録された。この詩は大正末期には国語科教材に収録されていたため(9)、広く知られていたと考えられる。この詩において「こほろぎ」

は雨の降る中で「鳴く」「うたふ」様子が描かれ、「さびしさ」や「つらさ、かなしさ」と関連づけて表象されている。詩は「こほろぎの吹鳴らす／銀色の笛に聞惚れて／さまよひ出づる／さびしい姿を／つくづくと見る／あはれなうたの抱き心」（筆者注：改行は「／」で示した。）と閉じられ、「あはれなうた」の心を呼び起こす虫としての「こほろぎ」の姿が印象づけられる。

このように古典詩歌での表現を受け継ぎ、近代詩においても「こほろぎ」は声の美しい鳴く虫として、また「世はあぢきなき」「涙をそゝぐ」「つらさ、かなしさ」など、もの悲しい心情とともに表現されている。そして鳴き声の美しさから歌をうたう、あるいは楽器を演奏するという擬人法によって表現されるようになった。「こほろぎ嬢」における「こほろぎ」という語も、このようなこおろぎのイメージを踏まえられていると考えられる。図書館での調べ物で「悲歎」「哀愁」をこほろぎ嬢はあじわい、その悲哀を「大きい声で歌をどなるとか、会話をするとか、或はパンを喰べ」ることによって癒そうと考え、「いま、せめてパンを喰べてみよう」と地下室食堂へ行く。そこで「会話を忘れかゝつた」こほろぎ嬢は「パン屋の店の女の子」にパンを注文するに際して「無愛想な音」を吐いて呆れられ、「産婆学の暗記者」の女性には声を出さないで心の中で話しかけるだけである。彼女は「大きい声で歌をどな」ったり、美しい声をゆたかに発するどころか、自然な会話もなすことがない。こほろぎ嬢はもの悲しい心境にある人物として語られるが、「こほろぎ」という名で呼ばれるにもかかわらず、その名に似つかわしくなく、音声をゆたかに発しない。これが彼女について「神経病」に罹っていると語られる所以であろう。

最後に海外の文献における「こほろぎ」についても確認しておきたい。「こほろぎ」の古語は「きりぎりす」であるが、石井和夫氏は(10)「こほろぎ嬢」の作品末尾での「産婆学の暗記者」という実学を学ぶ女性と、無用のことばかり考えているこほろぎ嬢との対比から、イソップ寓話の「アリとキリギリス」の働き者と享楽家の対比を連想されている。また川崎賢子氏は前掲書において幸田露伴や寺田寅彦が「アリとキリギリス」のキリギリスを「蟋蟀」と表記していたことを指摘されている。日出山陽子氏は(11)尾崎が読んだ可能性のある小泉八雲「草雲雀」における「世には歌はんが為めに自分の心臓を食はねばならぬ人間の蟋蟀が居る」という一文を「こほろぎ嬢」と関連づけて考察されている。ほかに、北欧・南欧では「こほろぎ」は詩人のたとえとしてよく用いられるという(12)。「こほろぎ嬢」においてこほろぎ嬢が詩人であることは明示されないが、こほろぎ嬢が関心を抱いたゐりあむ・しやあぷについての「古風なものがたり」の中に「東洋の屋根部屋に住む一人の儚い女詩人が、彼女の儚い詩境のために、異国、水晶の女詩人を、粗末なペンにかけぬとも言へないの

である。」とあり、ここで「東洋の屋根部屋に住む一人の傍い女詩人」と語られる女詩人の特徴は、こほろぎ嬢と通じ合っている。「こほろぎ」という女主人公の名は、彼女が詩人であることを暗示している可能性もあるだろう。

三　「古風なものがたり」と「どつぺるげんげる」
――こほろぎ嬢の恋と反逆

本節ではこほろぎ嬢の「恋」の対象であるゐりあむ・しやあぷという異国の詩人についての「一篇のものがたり」（以下本章では「しやあぷの物語」と称する。）における先行作品との関係について検討したい。

（一）「古風なものがたり」と「伊勢物語」・七夕伝説

「しやあぷの物語」は「むかし、男女、いとかしこく思ひかはして、ことごころなかりけり」という「古風な書出し」の物語であると紹介されるが[13]、この文は『伊勢物語』第二十一段の冒頭部と全く同じである。またこの物語は「ゐりあむ・しやあぷ」という異国の詩人と「ふいおな・まくろおど」という女性詩人との恋物語である。二人には「こころをこめた艶書のやりとり、はては詩のやりとり」があったことから、語り手「私たち」はこれらを踏まえたためか「私たちの国のならひにしたがへば、たぶん」と『伊勢物語』第三十八段の和歌の贈答部分「君により思ひ習ひぬ世の中の人はこれをや恋といふらむ」「かへし　習はねば世の人ごとに何をかも恋とはいふと問ひし我しも」を引用して、そのような「歌にも似た詩のやりとりがあつたのであらう」と推測する[14]。しかし『伊勢物語』第三十八段の和歌の贈答は男女のやりとりではなく、男性同士の友人関係において、恋心にたとえた楽しい贈答がなされたものである。これまでにも語り手「私たち」が「風のたより」や「風説」、幸田当八の学説などを引用、紹介してこほろぎ嬢を説明する場合、必ずしもそれらが「私たち」の語るこほろぎ嬢の様子にそぐわないことについて考察してきたが、ここで語り手「私たち」が参照する『伊勢物語』第三十八段も、男女の恋仲でのやりとりの例示とするには適格ではない。

しかし『伊勢物語』のこの部分を例示することには、「しやあぷの物語」を具体的に紹介するに先立ち「しやあぷの物語」に関わって、異性愛という枠組みに依らない関係性や、あるいはジェンダーによる同性同士の連帯というホモソーシャル関係に依らない関係性を示しているとも考えられる。「しやあぷの物語」に登場する「余等」というしやあぷの友人知人らは、「こほろぎ嬢」の語り手「私たち」同様に一人称複数形でありながら、複数の「余」の間で混乱や葛藤は見られない。「余等」は男女の関係における「接吻のこと寝台のこと」を互いに語りあいたがり、しやあぷの死後はまくろおどを探し「床まきの香料はどれにしたものか」と女性を共有し

ようとする。それに対してしやあぷは「余とふいおなに接吻が何であらう」と男女の肉体関係に重きをおかない価値観を持ち、二人の関係を「たがひに寄り添ふて、大空の恒星を見てゐた」と語り、二人は「太陽のあゆみや遊星のあそびに詩魂を託」すという、詩についての価値観を共有していた。渡邊綾香氏は[15]「しやあぷの物語」のなかで、しやあぷと友人らには心の距離があり、しやあぷが女性を媒介とする男性同士というジェンダーによる連帯、ホモソーシャル共同体からの離脱をはかり、別の価値（詩境）による理解者を求めることを指摘されている[16]。しかし別の価値（詩境）による理解者をしやあぷが求め、それがまくろおどによって得られていたとしても、しやあぷとまくろおどとの関係が「恋愛」と語られるところに、異性愛という枠組みの持つ強力さが見られよう。

「しやあぷの物語」は、「古風な」物語とされ、「女性が男性に逢いにいく」というモチーフの物語であり、しやあぷは星々など「天文」のことばかり話したり詩に書き、しやあぷが死んだときには友人らが「つひに天上してしまつた！（略）まるで故郷に還つたつもりでゐるだらう！」と言っている。これらより「しやあぷの物語」は、陰暦七月七日に天の川を渡って、年に一度織女星が牽牛星に逢いに行くという古代中国の七夕伝説の物語に類似しているとも考えられる。そうすると「秋風」「こほろぎ」とともに「七夕」という和歌で秋に詠まれる景物が、晩春の物語である「こほろぎ嬢」の作中に配置されていることになる。「こほろぎ（嬢）」とともに「七夕」の物語に類似する「しやあぷの物語」は、ともに「晩春」という季節から外れている。このように両者が季節外れの存在であることは、両者が「神経病」と評されるような健康とされる状況にはないことや、第五節で論じるこほろぎ嬢としやあぷの孤独感や儚さを、象徴的に表しているとも考えられよう。

（二）「どつぺるげんげる」、火星、反逆

「しやあぷの物語」では、しやあぷの生きていた間、しやあぷとまくろおどの間の「艶書のやりとりは、間ちがひのない事実であつた」と語られる。しかししやあぷが死んだ時は「ひとつの骸で両つのたましひが消えて」、まくろおどは「ゐりあむ・しやあぷの骸のなかに、肉身を備へない今一人の死者として」横たわっていたこと、「ふいおな・まくろおどは、まつたく幻の女詩人であつた。詩人しやあぷの分心によつて作られた肉体のない女詩人。」「分心詩人ゐりあむ・しやあぷの心が男のときはしやあぷのペンを取つてよき人まくろおどへの艶書を書き、詩人の心が一人の女となつたとき、まくろおどのペンを取つてよき人しやあぷへ艶書した」ことが語られる。

この二人の不思議な現象は「しやあぷの物語」では「どつ

ぺるげんげる」と語られているが、一般的にいうドッペルゲンガー（自己二重身）の現象とはかけ離れている[17]。しやあぷのせりふには「ふいおなと余は寄り添ふて」「接吻はした」とあり、まるでまくろおどが肉体を持っている人物であるかのように語られているが、一方でしやあぷは「余のふいおなは、余の心臓より抜けいだし、行方もわからず」「もう、旅に行ってしまった」と、自分の心臓の中にまくろおどが存在していて、それが自分から出ていくようにも語る。またしやあぷの友人らは、しやあぷの家やしやあぷの葬列の折に「つたんかあめん時代」から伝わる香料の「香気」を感じ、それをまくろおどの存在の証左とするが、「香気」がしているだけで、それがまくろおどという人物が実在する証拠となるわけではない。しやあぷのせりふから考えれば、意識を保ったまま霊とやりとりをするタイプの霊媒のような経験をしやあぷがしているようでもあり、「心が男のときは」「心が一人の女となつたとき」という説明から考えれば、二重人格や憑依、自動書記といった現象のようでもある[18]。このことについては第四節で再度検討するが、「余等」によってしやあぷが「気体詩人」と言われることと関わって、「しやあぷの物語」の背後に想定される可能性のある作品を二つ確認しておきたい。

まず、尾崎翠も読んだ可能性のある芥川龍之介「侏儒の言葉」の中の「火星」という短文である[19]。尾崎翠「詩二篇「火星の人たち」が使う言葉は「フイオナ・マクロオドの詩の言葉」で「火星の人間はみんな気体詩人さ」という箇所があるが、「火星」で書かれている火星の人間についての記述は「こほろぎ嬢」や「ヰリアム・シヤアプ」の典拠として想定される可能性がある。次に「火星」の全文を紹介する。

火星の住民の有無を問ふことは我我の五感に感ずることの出来る住民の有無を問ふことである。しかし生命は必しも我我の五感に感ずることの出来る条件を具へるとは限つてゐない。もし火星の住民も我我の五感を超越した存在を保つてゐるとすれば、彼等の一群は今夜も亦篠懸を黄ばませる秋風と共に銀座へ来てゐるかも知れないのである。

ここで「火星の住民」が「秋風と共に」地球へ来ているとあることに注目したい。「神々に捧ぐる詩」のうち、もう一篇「チヤアリイ・チヤツプリン」では「あきかぜとともに」という詩句が何度も用いられる。また「こほろぎ嬢」においても「秋風」は「この古風な一篇を読み進んだこほろぎ嬢は、身うちを秋風の吹きぬける心地であつた。このやうな心地は、いつも、こほろぎ嬢が、深くものごとに打たれたとき身内を吹きぬける感じであつて（略）秋風の吹きぬけたのちは、もはや、こほろぎ嬢は恋に陥つてゐる習ひであつた。対手はいつも、身うちに秋風を吹きおくつたもの、こと、そして人で

神々に捧ぐる詩」のうち一篇「ヰリアム・シヤアプ」には、

あつた。」とあるように、こほろぎ嬢にしやあぷへの「恋」をもたらす重要なモチーフとして登場する。

また「火星」には「火星の住民」について「我我の五感を超越した存在を保つてゐるとすれば」とあるが、「しやあぷの物語」におけるふいおなが「五感を超越した」存在であるとすれば、「みすてりの詩人」であるしやあぷも五感を超越した感覚を有していたために、ふいおなの存在を感知して交流できたとも解釈できるだろう。

次に、『火星界の実況』（大学館、一九一〇）という書籍について確認したい。先にしやあぷとまくろおどとの関係について、しやあぷが霊媒のような経験をしているか、あるいは二重人格や憑依、自動書記といった現象のようでもあることを指摘したが、「火星語」を話し、書いた霊媒としてエレーヌ・スミスが挙げられる。彼女の語る火星の物語などをノートに書き溜めた心理学者のテオドール・フルールノワは、その記録をもとに一九〇〇年『インドから火星まで』を出版し、欧米で話題となる。日本でも渋江易軒によって翻案され一九一〇年に『火星界の実況』という題で出版された。尾崎翠がこの本を知っていたかどうかは定かではないが、神秘的な現象として火星の言葉を用いた人間がいるという発想が、尾崎翠の独創とは限らないことが分かる。

さて「しやあぷの物語」の終わりには「東洋の屋根部屋に住む一人の儚い女詩人が、彼女の儚い詩境のために、異国、水晶の女詩人を、粗末なペンにかけぬとも言へないのである。」とあり、またそのような詩人や心理医者は「冒瀆人種」で「いつの世にも、彼等は、えろすとみゆうずの神の領土に、まいなすのみを加へる者どもである。彼等が動けば動くだけ、ゐりあむ・しやあぷの住んでゐたみすてりの世界は崩されるであらう。」と閉じられる。こほろぎ嬢は「しやあぷの物語」で語られる東洋の女詩人のように、しやあぷのことを調べ、ノートに書こうとする。こほろぎ嬢のこのような行為を末國善己氏は「対価を払ってまで、確信的かつ主体的に」「薬の副作用という要素を越えて、自ら選択しているとも考えられる」と指摘されている(20)。こほろぎ嬢は「しやあぷの物語」の語り手の、「えろすとみゆうずの神の領土」というしやあぷが住んでいた神秘的な世界が明らかにされることを望まない価値観に反逆して、「恋」に陥り興味を喚起された相手について主体的に知ろうとしているとも言えよう。

四　「こほろぎ嬢」における神経病者たち

本節では「こほろぎ嬢」において「神経病」に罹っているとされる者たちについて検討したい。まず、こほろぎ嬢がしやあぷについて図書館で調べている時に読んだ文学史の序文にあった「神経病に罹つてゐる文学」について検討する。次に「神経病に罹つてゐる文学」をふくめ、「こほろぎ嬢」に

おいて「神経病」とされる者たちについて検討し、この作品に登場する者の多くが「神経病」とされるか「神経病」に類する性質を持っていることを確認する。

（一）「神経病に罹つてゐる文学」について

こほろぎ嬢は図書館でしやあぷについて探索するが、彼は「影の薄い詩人」であり、書物の中で彼の存在は見つかりにくく「深い悲歎に暮れ」た。こほろぎ嬢は語り手「私たち」によって「儚い生きもの」であると紹介されたが、しやあぷもまた「儚い」詩人であると言える。

またこほろぎ嬢が「哀愁」を感じた文学史の序文には「健康でない文学、神経病に罹つてゐる文学」が「出版書肆の主人」の思想に合わず嫌悪に値するため、序文の著者によって「割愛」されていた。その文学とは「考へる葦のグルウプ」「黄色い神経派」「コカイン後期派」で、また「おすか・わいるど氏は背徳の故」「ゐりあむ・しやあぷ氏は折にふれ女に化けこみ、世の人々を惑はしたかどにより」割愛された。これらの文学とは具体的にどのようなものが想定されるかを確認したい。

まず「考へる葦のグルウプ」という名前からはパスカル「パンセ」が想起されるが、尾崎翠「詩二篇　神々に捧ぐる詩」の「キリアム・シヤアプ」においても、「さはれキリアム／にんげんは／まこと、考へる一本の葦／一本の／痩せた／もの」を考へる葦／一本の植物、細いあしのなかに／たましひは宇宙と広い。（筆者注：改行は「／」で示した）とあり、「考へる葦」というグループ名は「痩せた」「細い」という儚い印象をもたらしながらも「たましひは宇宙と広い」と矜持や尊厳を同時に示していると見られよう。また「黄色い神経派」とは典拠が分からないが、こほろぎ嬢の飲む粉薬は黄色という説もあることから、「黄色い神経派」の「黄色」も神経を病んでいることを示す色として用いられていると考えられよう。「コカイン後期派」については、コカイン常用者であった作家を確認すると、二重人格の代表的な小説「ジキル博士とハイド氏」を書いたスティーブンソンが挙げられる。この小説でジキル博士が用いる秘薬もコカインである。その他に、火星人が地球に攻めてくる小説「宇宙戦争」の著者ウェルズ、「椿姫」の著者デュマ、ＳＦ作家のジュール・ヴェルヌらが挙げられよう。「文学」の作家ではないが、フロイトもコカインを用いた。そして「サロメ」等の著者であるオスカー・ワイルドの「背徳行為」とは同性愛のことと考えられる。なおアラ・ナジモヴァが主演した映画「椿姫」「サロメ」を尾崎翠は「映画漫想（三）」（『女人芸術』一九三〇・六）で熱く語り高く評価している。

先に「しやあぷの物語」で語られるしやあぷとまくろおどの関係について、二重人格の症例のようでもあること、また「火星」に関連することを指摘したが、コカイン常用者であ

った作家には、二重人格や火星に関係する作品を書いた作家らが含まれていた。また「サロメ」や「椿姫」のように、作品の最後に悪女とされるヒロインの女性が不幸な亡くなり方をする作品の作者も挙げられているが、これは「こほろぎ嬢」の最後で、こほろぎ嬢による「産婆学の暗記者」と想定された女性に向けた独白に「暁けがたのこほろぎを踏んで、あなたの開業は毎朝繁盛しますやうに。」とあることと関わって考えられよう。

こほろぎ嬢は心ならずも経済的に田舎の母親を頼らざるを得ない状況にありながらも、「ねんぢゆう、こほろぎなんかのことが気にかかり」、それゆえ「何の役にも立たない事ばかし」考えていた。「こほろぎ嬢」の物語のなかで、こほろぎ嬢が考えていた「何の役にも立たない事」とは、しやあぷのことを指していると思われる。したがってこの独白における「こほろぎなんかのことが」「気にかか」るとは、こほろぎ嬢がしやあぷに「恋」をしたことを暗示しているのではないだろうか。「サロメ」も「椿姫」も、それぞれの作品においてヒロインは恋のために不幸な最期を遂げる。それと同様に「こほろぎを踏んで」とは、こほろぎ嬢の「恋」の相手であるしやあぷの作品やしやあぷについての記載が本のなかに見つからず、その「恋」が徒労であることや、彼女がその「恋」のために不幸な目に遭うと自ら想像していることの暗示とも考えられよう。またこほろぎ嬢は「何の役にも立たない事」を考える元となった「こほろぎ」が、産婆という「役に立つ」実業に携わると想定した女性に踏まれて、その仕事が「繁盛しますやうに」と願っている。産婆が繁盛するということは出産する女性がたくさんいるということであり、その背景には女性たちの恋の成就や、生まれた赤子が健康に発育すること等も想定される。こほろぎ嬢は「サロメ」や「椿姫」のヒロインとは異なり「悪女」とされるような人物ではない。しかしサロメや椿姫と同様に、こほろぎ嬢も出産につながるような「恋」をするわけでもなく、その「恋」はうまくゆかない。また「霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法」を願うこほろぎ嬢と、「産婆学の暗記者」として想定される女性の将来の産婆としての繁盛とは対照的であり、こほろぎ嬢の自己否定的な心境がうかがわれる。

またフロイトと「こほろぎ嬢」における幸田当八とは「(分裂)心理研究に熱心」な同業者である。末國善己氏は前掲論文において幸田当八が語り手「私たち」によって「神秘の神に多少の冒瀆」を働くとされたことについて、「フロイティズムを批判したカトリシズムの言説を彷彿とさせるものがある。また、実験対象の「若い女の子」と対面して「心理変化」をうかがうという手法は、やはりフロイト派の「自由連想法」や「対面療法」を思い起こさせる」こと、「こほろぎ嬢」発表当時の一九三二年の時点の日本では「「幸田氏の学説」は「一医員」としては異端の学説を研究していたといわざるを

得ない」ことを指摘されている。

もう一つ、オスカー・ワイルドの背徳行為が同性愛を指しているとすれば、それは「しやあぷの物語」に関わって語り手の例示した『伊勢物語』第三十八段の、男性同士の友人関係における異性愛のパロディとしてのやりとりに呼応していると考えられよう。竹内佳代氏は「同性愛作家である「おすか・わいるど」も列挙されていることは、そうした排除の一端が、近代家父長制下のジェンダー規範と、それを基盤とする異性愛イデオロギーがもつ排除構造、すなわち女性嫌悪と同性愛嫌悪の交差に因っているのを明確に映しだしている。」と論じられている(21)。さらにリヴィア・モネ氏は、ナジモヴァの「サロメ」は、そのような排除構造へ反逆するような「アーリー・フェミニズムとレズビアンの色の強いアート、あるいは女性中心の大衆現象を復活させながらパロディ化した作品としても見做すべき」また「女たちの想像の共同体」が垣間見えるものとして論じられている(22)。

以上をまとめると、「神経病に罹ってゐる文学」とされた作品には、「しやあぷの物語」で語られるしやあぷとまくろおどに関わるような二重人格や火星に関係する作品、幸田当八に関わる異端の学説、そしてこほろぎ嬢の最後の独白に関わるような、「恋」によってヒロインが不幸な最期を遂げる作品などが含まれていた。これらには魅力的であっても日常現実からかけ離れた事象や人物、また不気味で怪しい事柄や不幸な出来事も描かれている。しかし他方で「神経病に罹ってゐる文学」とされた作品には、「たましひは宇宙と広い」「女たちの想像の共同体」といった精神的に広々とした自由さや解放感、新たな連帯の可能性が表現されているような、肯定的なニュアンスで評される作品も含まれていた。「神経病に罹ってゐる文学」とはこのような両義性を持つものと言えるだろう。

(二)「こほろぎ嬢」における神経病者たち

「こほろぎ嬢」において「神経病」に罹っているとされたものは、粉薬を飲みすぎたことがその原因と語られるこほろぎ嬢のほか、桐の花、そして「神経病に罹ってゐる文学」とされた作品である。このような文学作品の作者には「ゐりあむ・しやあぷ」も含まれている。したがって「ふいおな・まくろおど」も「神経病に罹ってゐる文学」作品の作者に含まれよう。

なお「粉薬」「桐の花」「まくろおど」には「白」で表されるという共通点がある。粉薬の色ははっきりせず、「褐色」「黄色」とも語られるが、「白い細かい結晶体」とも語られる。雨の日の桐の花の匂いは「ひと頃よりは幾らか白つぽく褪せ漂つてゐた」と語られ、「まくろおど」は「白つぽいみすてり派の詩」を書いていたと語られている。

ところで、こほろぎ嬢が図書館の地下室食堂で出会い、話

しかけようとした女性は「黒つぽい痩せた」女性であると形容されている。こほろぎ嬢はこの女性を根拠なく「産婆学の暗記者」と信じこんでしまう。多くの先行研究で「産婆学」は実学で「産婆」は女性が経済的に自立できる職業であり、経済的苦境にあるにも関わらず「年中何の役にも立たない事ばかし考へてしま」ったこほろぎ嬢とは対照的であることが論じられてきた。しかしこの「産婆学の暗記者」は、こほろぎ嬢のありかたに対して実学的であることや生活力の点においてのみ対照的なのではなく、白と黒という付与されている色彩イメージからも対照的であり、「神経病」に対して、神経病ではない、健康さが象徴されているのではないだろうか。

とはいえ別の観点からは「産婆学の暗記者」は、「桐の花」や「まくろおど」やこほろぎ嬢と類似する存在であるとも考えられるのである。「産婆学の暗記者」は「地下室の片隅」で鉛筆を削っていた、「地下室の一隅のもつとも薄暗い中」にいた人物であると語られるが、桐の花は「原つぱの片隅に一群れ」咲いていたのであり、まくろおどは「人に知られない何処かの片隅に生きて」いた。またこほろぎ嬢の住まいも「二階の借部屋で、三坪の広さ」であるところから、こほろぎ嬢も世界の「片隅」に生きている存在と考えてよいだろう。彼女らは皆世界の「片隅」で生きているのである。そして産婆とはかつて「魔女」と見做され迫害された女性でもあった[23]。「悪魔の粉薬」が原因で神経病になったと言われるこほろぎ嬢と、用法によっては幻覚を見せるような薬物を用いて出産をサポートすることで魔女と見做された「産婆」とは、中毒者と医療者という立場の違いはあれども薬物に付随する魔術性に関わるという共通点を持つ。

また「産婆学の暗記者」はこほろぎ嬢から「未亡人」と見做されることより、若くはない、盛りをすぎた女性であると考えられる。この点で「色褪せた」桐の花や、「桐の花の草臥れてゐるほどに草臥れてゐた」外套を着て「外套とおなじほどの新鮮さに見えた」と語られるこほろぎ嬢とも共通する。そして「産婆学の暗記者」は「黒つぽい痩せた」女性で、「腰の太い」と「余等」から推測されていた（実は肉身が存在しなかったが）「まくろおど」の豊満な女性イメージとは対照的に、貧弱なイメージで語られる。

以上から「産婆学の暗記者」は「健康」という属性を担い、こほろぎ嬢から将来の産婆としての開業の「繁盛」を願われてもいるが、他方では「神経病」と語られる三者に加えて彼女もまた「片隅」でひっそりと存在していた者であり、「神経病」者に類するような魔術性に関わるという側面をも有する、両義的な存在であると言えよう。

本節での検討より、語り手によって「神経病」に罹っているとされるこほろぎ嬢、桐の花、しやあぷ等の「神経病に罹ってゐる文学」だけではなく、幸田当八や「産婆学の暗記者」も「神経病」に類する存在であることが分かる。

さて、先に論じたように「神経病」とされる文学作品は「たましひは宇宙と広い」「女たちの想像の共同体」といった肯定的な意味でとらえることも可能であった。しかしこほろぎ嬢は、前節で論じたような反逆的な心情を有してはいても、そのような肯定的な可能性に目を向けるのではなく、文学史の序文を真に受けて読んで「頭痛がひどく」なるという生命力が弱められる状態になる。このような弱った状態でこほろぎ嬢は地下室食堂へ降りてゆき、粉薬を飲み、パンを食べて「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる事実をも忘れてゐる様子」となり、失調を回復させたあと、「産婆学の暗記者」を想像の中での会話の相手として独白をする。次節でこの独白について検討したい。

五　頭を打たれる感覚、こほろぎ嬢の孤独

（一）こほろぎ嬢の頭痛、「私たち」と「母」との共通性

こほろぎ嬢は粉薬の飲みすぎによる「神経病」であると語られるが、こほろぎ嬢の症状は頭痛である。この頭痛については次のように語られている。「粉薬で疲れた頭をも、さう激しくは打たない。」「こんな序文がこほろぎ嬢にとつて何の役に立つであらう。頭痛がひどくなつただけであつた。人間とは、悲しんだり落胆したりするとき、日頃の病処が一段と重るものであらう。」「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる」。これらより、こほろぎ嬢には日常的に頭痛があること、その頭痛が悲しみや落胆によってひどくなる場合があること、またその頭痛は「打た」れる、「打ちつけられ」るという感覚をもたらすことが分かる。頭痛を和らげるために飲まれるのがこの粉薬であるのだから、粉薬は頭痛薬であろう。それならば、もともとこほろぎ嬢には頭痛があったために粉薬を飲み始め、結果的に常用するようになったのであろうが、そもそもの頭痛の原因はどこにあるのだろうか。

第一節でも述べたように、こほろぎ嬢が粉薬を飲むのは、彼女がある文学史の序文を読んで、しやあぷの著作が「健康でない文学、神経病に罹つてゐる文学等」であるため出版書肆の主人から嫌悪されたゆえに、文学史の著者たちがしやあぷを文学史から除いたと知って、悲哀や落胆をあじわい「頭痛がひどくなつた」時である。そこでこほろぎ嬢は地下室食堂へ行き、頭痛薬を服用し、パンを食べたことによって「文学史の序文によつてひどく打ちつけられてゐる」状態を「忘れ」、失調から回復する。しかしこれは本質的な回復ではなく対症療法的な手当てによる回復であると考えられる。

薬とパンの摂取後、こほろぎ嬢は「産婆学の暗記者」であると思い込んだ女性が「暁けがたのこほろぎを踏んで」、その将来の開業が「毎朝繁盛しますやうに」と願う。こほろぎ嬢は「ねんぢゆう、こほろぎなんかのことが気にかかりました」と内的独白をして、自らの精神に添って親しく存在した対象である「こほろぎ」が、産婆に踏まれることを想像する。

しかし「産婆学の暗記者」は先に確認したように両義的な存在である。したがって、たとえば産婆になった女性がこほろぎの鳴き声に親しみを覚えるような、こほろぎ嬢自身の精神性や趣向を支持する仲間であると想像してもおかしくはないのだが、こほろぎ嬢はそのような想像をしない。そしてこほろぎ嬢は「あなたはたぶん嗤はれるでしょう」と「産婆学の暗記者」から自分が「嗤はれる」という被害妄想を持っており、彼女を「恐れ」ながら告白をする。その告白は心中での独白であっても「小さい声」であり、「こほろぎ」という名で呼ばれながら、美しく響く声ではないところに、こほろぎ嬢の弱っている様子も見受けられるだろう。

ここからこほろぎ嬢には、「頭を打たれる」感覚を薬や食べ物によって忘れても、なお被害妄想を持っていることに繋がるような、薬や食べ物では根幹からは癒されない不安や怖れが、常に存在していると考えられるのではないだろうか。こほろぎ嬢は文学史の書物を渉猟してもしやあぷについての記述が見つからないことに悲しんでいるが、これは文学史という世界のなかで居場所のないしやあぷに、こほろぎ嬢が自己の姿を見出し、共感したゆえの悲しみであるとも言えるだろう。

筆者は先にこほろぎ嬢について次のことを論じた[24]。こほろぎ嬢の母親はこほろぎ嬢を経済的に援助していても、精神的にこの世に繋ぎ留め根づかせる役割はしていない。またこほろぎ嬢の自己の根底は不安定な状態にある。世界に対する「基本的信頼」を喪失しているこほろぎ嬢が、「しやあぷの物語」に心を捕らわれて探索するさまは、たましいを抜き取られたような状態にある人物が、失ったたましいを取り戻しこの世にとどまろうと試みているかのようであり、「儚い生きもの」であると語られるこほろぎ嬢を、「しやあぷの物語」が世界に対する「基本的信頼」の代替物として支えているということである。そのような代替物であるしやあぷが文学史という世界から除外されているとこほろぎ嬢が知ったことは、彼女の安心感をゆるがせ、頭痛を引き起こすのに十分であっただろう。

さて、この作品の語り手である「私たち」は、曖昧な情報に影響されながら、こほろぎ嬢や彼女が飲む粉薬について否定的な解釈を有しているが、その実態は「途上の噂ばなし」ほどではないととらえている語り手であることを第一節で論じた。語り手によるこほろぎ嬢への否定的な解釈は、こほろぎ嬢が神経病であることから来ているが、語り手はこほろぎ嬢の神経病の原因を粉薬の飲みすぎに帰している。つまり語り手は神経病や粉薬を否定的にとらえているが、こほろぎ嬢自身を否定的にとらえてはいない。またこほろぎ嬢が桐の花の芳香を拒むことを「よほど罰あたり」と評しながらも、その花の匂いが「神経病」に罹っていることを理由に、幸田当八の怪しげな学説に依拠しつつこほろぎ嬢が桐の花の匂いを

拒むことへの理解を示した。

このような語り手「私たち」の、こほろぎ嬢自身については否定的にとらえることなく、こほろぎ嬢の神経病の原因をこほろぎ嬢自身に帰せず、「悪魔の粉薬」に責任転嫁することでこほろぎ嬢をかばうことにもなる態度には、こほろぎ嬢に対する保護的、支持的な態度が見てとれるのではないだろうか。しかしこの態度は、「神経病」を否定的にとらえることで、「神経病」に含まれる新たな芸術や思想等が展開する可能性を阻んでしまう、つまりこほろぎ嬢が新しい世界で生きていくことを阻んでしまう可能性を結果的に有することにもなる。このような、こほろぎ嬢が「神経病」の状態に陥りながらもしやあぷ・まくろおどが住まう神秘的な世界を知ろうとするような、新たな芸術や思想が展開されることよりも、「神経病」ではないことを好ましく思うような語り手「私たち」は、こほろぎ嬢の母と共通する心性を持っているのではないだろうか。

こほろぎ嬢の母は、おそらくはかつて健康であったこほろぎ嬢の姿を知っており、また田舎と都会と離れて住んでおり、だからこそこほろぎ嬢が「頭の病気」をすれば、その「何倍も心の病気に憑かれて」しまうほど、こほろぎ嬢のことを心配するのであろう。またこほろぎ嬢自身が、しやあぷ・まくろおどが住まう神秘的な世界を明らかにすることを望んでも、その母は娘であるこほろぎ嬢が「頭の病気」「神経病」になってまでそんなことをするのは望んでいないだろう。そして健康であったこほろぎ嬢を知っている目には、こほろぎ嬢がそのようなことを望むのは、こほろぎ嬢自身のせいではなく「悪魔の粉薬」や「神経病」のせいだと見えてもおかしくはないだろう。

（二）こほろぎ嬢の孤独

こほろぎ嬢としやあぷ・まくろおどの孤独に関して共通するところと異なるところを確認しつつ、こほろぎ嬢の孤独について考察したい。こほろぎ嬢は「パン屋の店の女の子」や母親とスムーズな交流ができず、また「産婆学の暗記者」やまくろおどには、一方的に嬢が話しかけるだけという関係である。こほろぎ嬢は同性同士の連帯関係から疎外されており、「知己に乏しい」と最初に紹介されたように、物語には母親しか知り合いが登場しない。「パン屋の店の女の子」や母親などとの経済的に必要な社交のほかに「こころこまやかな」交流をする相手の存在は語られず、こほろぎ嬢が孤独な存在であることがうかがえる。

他方でしやあぷは地上の現実の世界では同性同士の交際から外れていたように語られ、その点ではこほろぎ嬢と同様に孤独な人物であるように見える。しかしこほろぎ嬢とは異なり、しやあぷを心配する母親の存在や経済的苦境が語られることはなく、それに彼には「こころこまやかな」やりとりを

する相手であるまくろおどがいる。その死後には文学史の世界で除外されるという憂き目に遭うが、これは生前に出会うことのなかったような仲間と共に除外されているということでもある。しやあぷには、恋人や、共に文学史から除外される仲間がいることから、地上の現実世界以外では一概に孤独な人物であるとは言えないだろう。

こほろぎ嬢とまくろおどとを比較すると、こほろぎ嬢はしやあぷに恋をして文学史の世界に彼を探しにゆくが、彼は影が薄くほとんど見つからない。これは恋の相手と交流しようとしても出来ないことを意味する。他方まくろおどもしやあぷに恋をした人であるが、彼女はしやあぷの元にゆき、艶書を交わすことも出来た。またこほろぎ嬢が草臥れた外套を着て古鞄を持っていたり、こほろぎ嬢のいる地下室食堂の空気まで「古ぼけた」ものであったと語られ、こほろぎ嬢に「古い」ということが関わる場合、否定的に語られるが、まくろおどの場合は「古風なものがたり」「私たちの国のならひにしたがへば」または「つたんかあめん時代」より伝わる香料などと、古さが伝統的なものや高貴なものへ繋がり、価値あることのように語られる。

このようにこほろぎ嬢にはしやあぷとは異なって恋人や仲間がなく、「まくろおど」とも対照的に片恋を味わい、「古い」という性質が肯定的な価値をもつこともない。

またこほろぎ嬢が図書館で地下室食堂に降りても安らぎやなぐさめになるような同性たちとの交流はなかったことは、地上という意識的な場のみでなく、こほろぎ嬢が書物の探索を通しても、また心の深い層に降りても、肯定的な女性像を見つけられないという孤独の象徴のようである。

（三）まくろおどへの問いかけ、「頭を打たれる感覚」

物語の最後にこほろぎ嬢は「おお、ふいおな・まくろおど！あなたは女詩人として生きてゐらした間に、科学者に向つて、一つの注文を出したいと思ったことはありませんか――霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法。私は年中それを願つてゐます。でも、あまり度々パン！　パン！　パン！　て騒ぎたかないんです」と「ふいおな・まくろおど」に向かって問い、訴える。この問いかけの意味について考察したい。

まず、このせりふにおける「でも」の後には「それは無理な願いかもしれない、でも」というような語句が省略されていると考えられる。この問いかけはまくろおどへの問いかけである。しかしこれは「科学者」に幸田当八のような心理研究の学徒を重ね合わせた上での問いかけではないだろうか。

こほろぎ嬢のまくろおどに対する問いを詳しく言い換えてみよう。まくろおどという「（肉体のない）女詩人」が「（男性の肉体の上で、たましひのみの存在として）生きて」いた間に、「科学者（たとえば心理研究の学徒）に向つて」「霞」を「吸う」という「まくろおど自身やしやあぷが書いたよう

な詩」を「読む」ことによって、「人のいのちをつなぐ」すなわち人間がものを食べずに生きる方法を明らかにしようという注文を出したいと思わなかったか。

「しやあぷの物語」の語り手は「今後時を経て（略）しやあぷの魂をあばく心理医者も現はれるであらう」「（心理医者や詩人が）動けば動くだけ、ゐりあむ・しやあぷの住んでゐたみすてりの世界は崩されるであらう」と述べたが、こほろぎ嬢がまくろおどに問いかけていることは、まくろおどが「みすてりの世界」を自ら崩して秘密を明かそうと思わなかったのかと問いかけていることになるのではないだろうか。この問いへの答えは、心理医者が「しやあぷの魂をあばく」ことで判明する可能性がある。しかしそれによってまくろおどの特殊性、つまり「みすてり」の性質が失われる可能性があり、ひいてはまくろおどという存在の消失に繋がる可能性もあるだろう。この問いにはこほろぎ嬢の反逆的な心情のきわまりを見ることができよう。まくろおどの神秘性や存在の秘密を知ろうとすることは、それらが解明されることを望んでいない価値観の持ち主にとっては「冒涜」でもあるだろう。そのような他者の価値観に大きく影響されてしまうほど弱っているこほろぎ嬢は、自らの願いに対する他者の価値観による罰として「頭を打たれる」感覚にさいなまされるのではないだろうか。

この問いに、「肉身を備へ」て存在することに対するこほろぎ嬢の違和感が見られることは言うまでもないが、他方でこほろぎ嬢は「肉身」があるゆえに、パンという食べ物に「没頭」したり薬を服用するという「肉身」への働きかけによって、心に変化が起こり「ひどく打ちつけられてゐる事実」を「忘れる」ことも出来る。しかし仮にこほろぎ嬢が経済的に恵まれ、母親から経済的援助を受ける必要がなくなり、必要な食べ物や薬が手に入り、あるいは「霞を吸つて人のいのちをつなぐ方法」が判明したとしても、「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という感覚にすぐ見舞われたり、被害妄想を持つような心身の状態から回復し、世界への基本的信頼が回復しなければ、こほろぎ嬢の苦悩は癒えないのではないだろうか。こほろぎ嬢の最後の独白は「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という感覚を「悪魔の粉薬」やパンによって麻痺させた上で発想され、出てきた言葉である。この麻痺のない状態で、ただ「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」感覚を味わっているこほろぎ嬢の苦悩や孤独感は、反逆的な心情と表裏を成しているものと考えられよう。

おわりに

「こほろぎ嬢」の末尾の一文は「地下室食堂はもう夕方であつた。」である。「夕方」とはこほろぎ嬢が読んだ「古風なものがたり」のなかで、しやあぷとまくろおどの二人が寄り添って大空の星々をながめていた時刻でもある。地下室食堂

の中でのこほろぎ嬢の孤独と、しやあぷ・まくろおどの「人の世のあらゆる恋仲にも増して、こころこまやか」であった関係とは対照的であり、こほろぎ嬢の索漠とした孤独感が際立って作品が閉じられる(23)。こほろぎ嬢は、図書館でしやあぷとまくろおどがやりとりした詩を読みたかったのであろうけれども、それらの詩が見つかって読めていたら、その詩はこほろぎ嬢の何らかの期待にこたえるものであり、こほろぎ嬢の「頭を打たれる」感覚は、ひとときでも癒えただろうか。

筆者は先に「こほろぎ嬢」の前に発表された尾崎翠作品「歩行」について、神経の疲れた人物がその心境に適合している詩を読むことによって、その神経の疲れが癒される可能性が描かれていることを論じた(26)。「歩行」とは対照的に「こほろぎ嬢」では、神経の疲れた人物において、その心境に適合する詩が見つからず、神経の疲れも癒されることなく、「頭を打たれる、ひどく打ちつけられる」という苦痛や苦悩、孤独感を味わっている様子が描かれている。

「こほろぎ嬢」とほぼ同時期に執筆・発表された尾崎翠作品「地下室アントンの一夜」は、「こほろぎ嬢」に対して男性詩人が主人公であり、男性が地下室に集う作品である。しかし「こほろぎ嬢」とは対照的に、作品の末尾には「爽やかさ」が用意されている。「地下室アントンの一夜」についての検討は次稿にゆずりたい。

注

(1) 近藤裕子「匂いとしての〈わたし〉—尾崎翠の述語的世界—」(初出『日本近代文学』第五七集　日本近代文学会　一九九七・十　近藤裕子『臨床文学論』彩流社　二〇〇三　所収)

(2) 竹田志保「尾崎翠「こほろぎ嬢」論—「少女共同体」と「分裂」」(『学習院大学大学院日本語日本文学』第六号　学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻　二〇一〇)

(3)『日本国語大辞典　第二版』(小学館　二〇〇〇)、李暁梅『枕草子』の「木の花は」段における「桐の木の花」条について——李嶠の『桐』詩などの漢籍にかかわって——」(『言語文化論叢』第七号　広島女学院大学大学院言語文化研究科　二〇〇四・三)を参照した。

(4) ただし中世の歌人正徹『草根集』所収歌に「ちり過ぎし外面の桐の花の色に面影近くさく樗かな」があり、近世には小澤蘆庵『六帖詠草』所収歌に「みどりなる広葉がくれの花散りてすずしくかをる桐の下かぜ」等がある。桐の花が和歌にまったく詠まれなかったわけではないが、数少ない用例と考えられよう。

(5) 大谷雅夫「歌と詩のあいだ」(『歌と詩のあいだ——和漢比較文学論攷』　岩波書店　二〇〇八)また『萬葉集』におけるこおろぎの歌については中嶋真也「湯原王蟋蟀歌小考」(『駒澤国文』第四六号　駒澤大学文学部国文学研究室　二〇〇九・二)も参照した。

(6) 高柳祐子「「きりぎりす」詠の変遷」(『鳥獣虫魚の文学史―日本古典の自然観3　虫の巻』所収　三弥井書店　二〇一二)

(7)『新古今和歌集』の引用は、『新古今和歌集』(田中裕・赤瀬信吾　校注　岩波書店　一九九二)による。

(8) 川崎賢子『尾崎翠　砂丘の彼方へ』(岩波書店　二〇一〇)

(9)『現代文芸読本 教授資料　巻二』国語教育研究会 編(永沢金港堂　一九二六)、『女子現代文芸読本 教授資料　巻二』国語教育研究会 編(永沢金港堂　一九二六)、『公民文化読本 教授資料　巻二』溝江八男太(永沢金港堂　一九二六)、『女子文化読本　教授資料　巻二』溝江八男太(永沢金港堂　一九二六)等が河井酔茗「こほろぎ」について紹介している。

(10) 石井和夫「風のゆくえ――「こほろぎ嬢」と「猿面冠者」」(福岡女子大学文学部紀要『文藝と思想』第七十号　福岡女子大学　二〇〇六・三)

(11) 日出山陽子「こほろぎ嬢」と蟋蟀をめぐって」(日出山陽子『尾崎翠への旅―本と雑誌の迷路のなかで―』　小学館スクウェア　二〇〇九　所収)で日出山氏は次のことを指摘されている。尾崎はウィリアム・シャープを讃えた「詩二篇　神々に捧ぐる詩」の「キリアム・シャアプ」(『曠野』一九三三・十一)において『学生版　小泉八雲全集』に言及しているが、「草雲雀」は『学生版　小泉八雲全集』第七巻(第一書房　一九三一)に収録されているため、尾崎も読んだ可能性がある。なお草雲雀は蟋蟀に似た昆虫で八～九月頃に美しい声で鳴く虫であることも日出山氏が紹介されている。

(12) 西槇偉「響き合うテキスト―豊子愷と漱石、ハーン」(『日本研究』第三十三集　国際日本文化研究センター　二〇〇六・十)において、ハーン「草ひばり」と関連して、平川祐弘『ラフカディオ・ハーン　植民地化・キリスト教化・文明開化』(ミネルヴァ書房　二〇〇四)を援用して指摘されている。

(13)「古風な書出し」が『伊勢物語』第二十一段の冒頭部と全く同じであることは、佐々木孝文氏よりご教示を受け、拙稿「「第七官界彷徨」と翠」(『郷土出身文学者シリーズ⑦「尾崎翠」』所収　鳥取県立図書館　二〇一一・三)で言及した。なお「こほろぎ嬢」の典拠と考えられるウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの物語については、森澤夕子「尾崎翠の両性具有への憧れ―ウイリアム・シャープからの影響を中心に―」(『同志社国文学』第四八号　同志社大学国文学会　一九九八・三)において、木村毅「個人内に於ける両性の争闘」(『新潮』一九二〇・十二、尾崎翠「松林」も掲載された号)等を挙げ、詳細に論じられている。「こほろぎ嬢」における「しやあぷの物語」は実在したウィリアム・シャープの伝記事項に忠実ではなく、木村毅等の資料を元に尾崎翠が自由に創作したと考えられることを森澤氏は指摘されている。

(14) 仁平政人「「翻訳」の文芸学――尾崎翠テクストの分析を手がかりに――」(『文芸研究』第一七一集　二〇一一・三　日本文芸研究会)に、ジョシュア・モストウ「「みやび」とジェンダ

――近代における『伊勢物語』――（ハルオ・シラネ、鈴木登美編　『創造された古典　カノン形成・国民国家・日本文学』　新曜社　一九九九・四）を参照して「和歌」による恋愛コミュニケーションを描き出す古典（カノン）として「伊勢物語」は作中に召喚されていると見ることができる。」「同時代（一九二〇年代前後）における「伊勢物語」評価と対応していると考えられる。」という指摘がある。なおモストウ氏の前掲論文には吉川秀雄『新註伊勢物語』（精文館書店　一九二六）について「吉川の歴史観の背後には、古代の日本では和歌が会話の主な手段であったという認識があり、これは少なくとも一九二〇年代には一つの通念となっていたようである。」とある。

(15) 渡邊綾香「分身と分心　―　尾崎翠『こほろぎ嬢』」（二〇〇〇年度昭和文学会秋期大会研究発表資料）

(16) 「しやあぷの物語」に関わるジェンダーの問題として、内海紀子氏が「フラグメントと再構築――太宰治「道化の華」、尾崎翠「こほろぎ嬢」」（『太宰治スタディーズ』第三号　「太宰治スタディーズ」の会　二〇一〇・六）において次の指摘をされている。「作中で姿を見せない「ふいおな」について、口さがない詩人たちが彼女の容貌や肉体についてしつこく取沙汰していたことを想起したい。もしこのシークエンスが、女性作家の作品よりも彼女自身に関心が寄せられがちな文学場のある種の傾向の、パロディだとしたら。」

(17) 川崎賢子氏の前掲書に次の指摘がある。「自分自身の「分身」を見た〈私〉は死にいたる破滅が待ち受けている、それを裏返しに、死に近い〈私〉のまえに霊としてあらわれるのが「分身」であるというのが、文学装置としてのドッペルゲンガーをめぐる呪いの定型だ。」また「詩二篇　神々に捧ぐる詩」の「キリアム・シャアプ」についても次のように論じられている。この言及は「こほろぎ嬢」で描かれたしやあぷ・まくろおどの関係にも当てはまると考えられる。「この表象をドッペルゲンガーの概念で説くことは、かなり無理が、いや、飛躍があるだろう。分心（分身）が、〈私〉を損なうことなく、むしろエロティックに、半身を抱きしめるプラトン的恋愛に近しい表象であることも、西洋近代的なドッペルゲンガー表象の歴史的意味に照らすなら例外的といえる。」

(18) 富士川義之氏は「分身の研究」（『海燕』一九八五年十月号　福武書店）において、ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの関係を「自分がもうひとりの自分を意識的・意図的に創り出すという行為が、本質的にファルスの要素を内包させている」と論じられている。

(19) 「侏儒の言葉」の引用は『芥川龍之介全集』第十三巻（岩波書店　一九九六）による。尾崎翠は芥川の『梅・馬・鶯』を愛読しており、「侏儒の言葉」も読んでいた可能性がある。

(20) 末國善己「異端・図書館・分身―尾崎翠『こほろぎ嬢』試論」（『尾崎翠作品の諸相』　専修大学大学院文学研究科畑研究室　二〇〇〇）末國氏は、こほろぎ嬢が通う図書館の閲覧が有

料だった可能性が高いと考えられること、また「せつせと図書館通い」を続けるのも、館外貸出が有料だったからという、穿った見方さえ可能」ということも指摘されている。

(21) 竹内佳代「町子のクィアな物語――連作としての尾崎翠『第七官界彷徨』『歩行』『こほろぎ嬢』――」(『国文』第一一〇号　お茶の水女子大学国語国文学会　二〇〇八・十二)

(22) リヴィア・モネ「サロメという故郷　尾崎翠の「映画漫想」におけるナジモヴァ論、変装のドラマツルギー、そして女性映画文化宣言」(『尾崎翠国際フォーラム in 鳥取２００４　報告集 vol. 4』「尾崎翠国際フォーラム in 鳥取２００４」実行委員会　二〇〇四)

(23) B・エーレンライク、D・イングリシュ著　長瀬久子訳『魔女・産婆・看護婦――女性医療家の歴史』(法政大学出版局　一九九二)等、魔女についての研究書で言及されている。

(24) 拙稿「尾崎翠の詩と病理―「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」を中心に―」(『和漢語文研究』第五号　京都府立大学国中文学会　二〇〇七・十一)

(25) 岩田宏「感情との戦い　――『尾崎翠全集』を読んで――」(『本と批評』一九八〇年七・八月合併号　日本エディタースクール出版部)に、こほろぎ嬢の「産婆学の暗記者」への語りかけについて次の指摘がある。「行きずりの人への無言の語りかけが人間的なあたたかみに溢れていればいるだけ、女主人公の孤独と悲哀は確実に伝わってくる。」

(26) 拙稿「尾崎翠「歩行」論――おもかげを吹く風、耳の底に聴いた淋しさ――」(『阪大近代文学研究』第十一号　大阪大学近代文学研究会　二〇一三・三)

※尾崎翠の作品の引用は『定本　尾崎翠全集』(筑摩書房　一九九八)に拠る。

【付記】

小稿は、第二回「尾崎翠フォーラム」でのパネルディスカッション「尾崎翠の見た夢は…」での発表と討論を元にまとめた拙稿「尾崎翠と和歌・短歌―『こほろぎ嬢』を中心に―」(「尾崎翠フォーラム in 鳥取２００２」実行委員会　二〇〇二)および「尾崎翠の詩と病理 ―「こほろぎ嬢」「地下室アントンの一夜」を中心に―」(前掲)、「「第七官界彷徨」と翠」(前掲)を元に、改稿・補筆したものである。パネルディスカッションに際してお世話になり、ご教示をいただきました皆様に深謝いたします。

(いしはら・みよ／京都府立大学大学院学術研究員)